オープンカレッジ

交響曲の解釈　憲法の解釈

危機にあって生を想う

名古屋経済大学
法学部准教授
宍戸　圭介

ししど　けいすけ　憲法学、生命倫理学。岡山大学大学院博士後期課程修了。博士（法学）。1978年生まれ。

左右に配置された2群のティンパニの乱打が終わると、弦楽器の細かく激しい動きから主題が回帰し、楽曲は力強く雄大なフィナーレを迎える。北欧デンマークが生んだ作曲家ニールセンの交響曲第4番は、いつ聞いても私の魂を揺さぶる。

同曲は、1914年夏に書き始められ、16年1月に完成した。これは第1次世界大戦が始まり、拡大していく時期に当たる。大戦においてデンマークは中立の立場をとっていたが、隣接するドイツが水路を封鎖する作戦を遂行したため、生活物資の不足やインフレなどの多大な経済的打撃を被ることとなった。

そうした暗い時代に作曲されたこの交響曲は、「不滅（The Inextinguishable）」という副題で知られている。ただし、ニールセン自身はこの副題は表題ではなく、作品の内容を示唆するものとしている。それは生命、そして音楽がいかなる暴圧にあっても屈することがなく＜消すことのできぬもの＞であるということだ。

さて、21世紀の今日においても、世界には紛争や暴力が絶えることがない。将来にわたって、われわれはいかにして生き延びることができようか。今年5月3日の憲法記念日に、安倍首相は（自民党総裁の立場で）日本国憲法第9条を改正する意向を強く示した。そこでは、9条1項および2項を残しつつ、自衛隊を明文で書き込む考え方が、国民的な議論に値するものであるとして提示された。

この首相の発言を巡っては、野党からの批判のみならず、自民党内部からも異論が出ている。たとえば、石破茂元幹事長は、首相の提案するやり方では、9条2項が定める戦力の不保持と自衛隊の存在との間で整合性が取れるのか不透明である旨、テレビ番組で疑問を呈していた。

憲法学においても、自衛隊については、その存在が9条2項の「戦力」との関係で認められるかどうかに焦点を当てて議論がされてきた（いる）。ただし、そこでは、技巧的な解釈が行われることもしばしばあった（ある）。しかし、難解な解釈論によらなければ、条文から原理や規範が析出できないのは問題があるだろう。なぜなら、そのような状況では、国政が憲法に基づいて行われているのかどうかを、主権者である国民がチェックすることが困難となってしまうからである。仮に、今後自衛隊について憲法改正の議論が進められるとすれば、上記のような観点に注意を払い、一層の混乱をもたらすことなきよう慎重に検討を及ぼすべきである。

なお、ニールセンの交響曲第4番については、戦争以外の側面から読み解く解説も存在する。ニールセンの自伝『フューン島の少年時代』（彩流社、2015年）の訳者である長島洋一氏は、同書の巻末楽曲紹介において、作曲家自身が経験した「結婚生活における闘争や、それに伴う生活上の混沌」の影響を指摘している。なるほど、私たちの生を揺さぶる（脅かす）危機は外だけにあるわけではない。

C中部経済新聞社
2017年05月25日　010面　01版　No.02